

子育て・子育てまちづくり(こそまち)特別研究委員会

9月1日ランチョンセミナー議事録

- 日時:2008年9月1日(月) 12:00～13:00
- 場所:朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター302B室
- テーマ 「子育て・子育てを支えるためのまちづくりを考える」
- ・パネリスト:野村 勲(国際医療福祉大学大学院教授)

中橋 恵美子(NPO法人わははネット代表)

- ・司会 :佐藤 克志(日本女子大学家政学部准教授)
- ・趣旨説明 :長谷川万由美(宇都宮大学教育学部准教授)
- ・運営スタッフ:八藤後猛(日本大学)、山崎晋(明治大学)
- ・参加者総数 約 30 名

1)自己紹介

(野村)

- 子育てに関わる3つの出来事や出会いについて

1998年、東京都の委員会の委員だったときに、東京にも「わははの会」という子育てサークルがあり、その代表が委員として入っていた。その頃から、子育ては重要だという認識は持ってきた。

政府の少子高齢化に関する審議会委員をつとめていたときに、少子高齢化といふように高齢化という言葉の冠言葉として少子がついていることに疑問を持った。

ロンドン郊外にある子どもの安全センターや無事故の会の視察などを早くから行ってきた。こども死亡の最大原因は不慮の事故と言われている。生み育てたものへ対する環境整備が必要だと実感した。

(中橋)

- 活動のきっかけ

・東京から香川に引っ越して、知り合いも少ない中、苦労した。とくに引っ越してきたため、地域に根差した子育てに関する情報がないことに愕然とした。香川では、育児情報が少ないことを痛感した。13年前、母の会の活動を通し、子育ての情報誌を作成したのがきっかけ。一人ひとりが情報発信源となって25000部発行してきた。

- 現在の「わはは」の活動・事業

・子育ての広場を運営(商店街の空き店舗を活用し、情報提供、悩み相談もできる)

常設4か所(行政からの委託2か所、子育てマンションのモデルルーム活用1か所他)

全国子育てタクシー協会事務局

2)福祉のまちづくり学会の場で取り組むべき課題(意見)

(野村)

- ・昭和 40 年代 物理的なバリアフリーから入ったが、知れば知るほどいろんな課題がある
→ テーマはいくらでもある。
 - ・一過性、一時的な問題で母親自身も子育ての問題を忘れてしまう。それが障害者運動と大きな違いがある。行政を味方にして活動していくことが必要。
 - ・イギリスのNPOが、街中、自然、建物など現地の場合を模した「事故の安全予防センター」を運営している。(京都の保健所でも趣旨が同じ施設があるが、規模も小さく、同種の施設は全国的には少ない)
 - ・「教育、人材育成」も重要
 - ・こどもの目線、子育て中の親の目線で、街中のバリア・危険箇所を点検するプログラム
 - ・例えば妊婦の中でも「妊娠何週目」などにより、問題は異なる。
- = 妊婦の問題について情報を蓄積し解決方法を周知するためには、調査の方法も重要

(中橋)

- ・世の中の環境が変わらない、不便を言っても変化しない(意味がない=我慢する)と思っていた。親世代は「がまんの申し送り」をしてしまう。
- ・トイレの問題にしては、買い物ときは、前日から水分を控えるといったこともあった。
- ・子連れでトイレに入ると子どもが鍵を空けてしまって、恥ずかしい思いをした。しかし、商業施設(サティ)の意見箱に投稿したら、トイレに子どもには手が届かないところに鍵がついて、落ち着いてトイレに入れるようになった。(ささいな変化だが、言ったら変わった)。その他、市の投書箱に「おむつ替えに布団はかえてじゃま」と書いて投函したら、ベビーベッドの布団がなくなった。また、病後児保育も実現した。自分たちが言ったら「変わるんだ」と実感した。
- ・みんなは、活動すれば世の中が変わるということを体験していない。つまりどうせムダだろうと思っていた。
- ・また、一人の意見(個人のみ)だけが主張しても限界がある。当事者の団体(総意)としての問題をまとめる。データ化する、整理する(論証)ことの重要性を実感した。

(野村)

- ・病児保育所(病気の子ども、病み上がりの子どもの預かる場所)など、どれだけあるのか、また一般的に知られていないところの問題があるので、そういうところに目を向ける必要もある
- ・もちろん、日常生活の中に課題が山積しているので、普段の生活の中から、さまざまな問題点・改善アイデアを蓄積することも必要。

(中橋)

・時代によって、変化する問題(例:子供の数、共働き環境)があるので、例えば、10 年前の調査結果をいつまでも使用するのではなく、常にそのときの当事者の意見を聞いてほしい。

(野村)

・がまん、「私がわかった」という気持ちで世の中に出ていかないでほしい。現在の状況は、こうしたみんなの考えが引き継がれてできてしまったものだから。

・たとえば、ノルウェイの ICF の調査によれば、子育ての満足度が一番高いのは南アフリカ、いちばん低いのは米国。なぜなら、南アフリカの例では、できないことはあたりまえというふうに思っているから。

・問題箇所の解決を願っていても、悪用されたら……と言われ改善されないケースもある。一部の、自分だけよいというような、心ない親だけを見て、改善に及び腰にならないようになってほしい。ほんとうにその制度が必要な人がいるということを考えて。親を甘やかしてはいけないなどという意見には、きちんと対応すべき。

・タクシーにしても、なににしても、1.妊婦のとき、2.子ども一人のとき、3.子ども三人のとき、というように時系列で対応すると迫力がでてきて、運動に説得力が出てくると思う。

(会場から質問・意見)

・子育てタクシーについて詳しく教えてほしい

(中橋)

・運転手は研修2日を修了した人のみ。(子どもや親へのサービスの支援方法について習得)

・基本、料金は一般の運賃と変わらない(中には1割増しにしてサービスを提供しているタクシー会社もある)

(野村)

多くの人は、病後児保育のことやその重要性を知らない。こういうことを世の中に伝えることも研究をしていくことの意義。

3)最後に

(長谷川)

・さまざまな分野の研究者、当事者などの集まっている「福祉のまちづくり学会」だからこそできることがあると感じた。「なんでも研究になる」との意見あったので、今後子育てに関する研究報告が多くみることができればと思う。今後も特別研究委員会へ会員みなさんの協力をお願いしたい。